

救われた目的(4)

2009年9月15日(火)

ベック兄メッセージ(メモ)

引用聖句

コリント人への手紙・第一 9章24節から27節

競技場で走る人たちは、みな走っても、賞を受けるのはただひとりだ、ということを知っているでしょう。ですから、あなたがたも、賞を受けられるように走りなさい。また闘技をする者は、あらゆることについて自制します。彼らは朽ちる冠を受けるためにそうするのですが、私たちは朽ちない冠を受けるためにそうするのです。ですから、私は決勝点がどこかわからないような走り方はしていません。空を打つような拳闘もしてはしません。私は自分のからだを打ちたたいて従わせます。それは、私がほかの人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者になるようなことのないためです。

今まで私たちは、「救われた目的とはいったい何か」ということについて、一緒に考えてまいりました。即ち、信じる者の信仰の闘いの勝利を得る必要性を考えてきました。今日は、「競走の規定と賞」について一緒に考えてみたいと思います。

イエス様を信じることは素晴らしいことであり、人生において最も大切なことです。「主イエス様」即ち「救い主」を持つこと、「イエス様を体験的に知ること」は、考えられないほど大切です。その体験によって初めて、私たちは、この地上において本当に満たされた生活を送ることができるのです。満たされた生活の土台とは、「永遠のいのち」、「主との平和」、また「罪の赦し」を持つことです。けれどそれだけでは十分ではありません。むしろイエス様が私たちを御手の中に置かれることによって、私たちの「主」として、私たちのすべてを支配なさることが大切なのです。

イエス様を知ることだけでなく、イエス様に用いられる器となるために、イエス様を「私たちの支配者」としてよりよく知ることのほうが、はるかに大切です。イエス様を信じることは即ち、勝利の闘いを勝ち取ることを意味しています。ですから、私たちはこの力によって、主のご目的である勝利の冠を得るために走ることを急がなければなりません。

私たちキリスト者の人生はおもむくままの散歩ではありません。まさに勝利を得るための闘いそのものです。言うまでもなく、私たちは自分自身の力によって闘うのではなく、主の恵みと憐れみによって、与えられた上からの力により闘わなければなりません。

新約聖書の中には前に話しましたように、ギリシャ・ローマ時代の競技のことが述べられていますが、いったいこれは何のために記されているのでしょうか。つまり、私たちに

とっては救われたということだけでは充分ではないということです。それは初めの第一歩に過ぎません。むしろ、闘いの目標が大切なのです。

そのためには、私たちは、今まで以上にずっとイエス様に信頼し、イエス様にすべてをゆだねなければなりません。私たちは喜びに満ちて真剣に主に従っていくべきです。私たちは主の証し人として働かなければならないのです。ですから、私たちは主イエス様のみこころである救いのご計画をふまえて目標を目指して走り、イエス様において上に召してくださる「主の勝利」を得ようと努めるべきです。イエス様は心からの献身を望んでおられます。妥協することは決して許されません。人間は、自分の利益を考え、この世の愛を求め、他人に対して冷たく接したり、心がかたくなであったり、生き生きとした祈りの力を体験することもなく、証しにも力がなく、みことばを最も大切なこととしないで、罪に負けてしまうのではないのでしょうか。栄冠を得るために、私たちは中途半端な曖昧な態度をとるのではなく、すべてを意識的にイエス様にゆだね、主によりたのむことが大切なのです。

今日は初めに、競走の規定について一緒に考えたいと思います

競技をする規定（ルール）のための必要条件については、ギリシャ時代を振り返ってみると分かります。まず奴隷ではなく、自由の民。二番目に、外国人ではなくその国の市民即ちギリシャ人であること。三番目に、犯罪者ではなくギリシャの神々に対して尊敬の念を持ち、忠誠を誓った人だけが、競技に参加することができたのです。即ち、自由市民権を持つ者、そして市民としての忠誠と尊敬がその前提となっていたのです。

もちろんそれだけではなく、身体の力と訓練も必要でした。その競技を指導するために、一人或いはそれ以上の審査官がいて、その前で競技の参加希望者はあらかじめ試験を受けなければならなかったのです。その競技が開催される前に、競技参加希望者は一人一人、時には十ヶ月にもなるほどの長い特別な訓練をすることがしばしばあったのです。更に、その準備のために非常に節制した生活のあり方が要求されたのです。

ギリシャの競技の場合には当時の競技場にあった講堂で、一定の期間、保健体育だけでなく一般的な教養に関する講義を受けた者でなければ、参加の許可を得ることができなかったのです。ギリシャ人の考え方は当時、肉体の訓練と精神的な教養とを切り離すことができないものでした。

ではいったいだれが信仰の走るべき行程を走り尽くすことができるのでしょうか。だれが栄冠を勝ち取るために走り抜くことができるのでしょうか。ただ罪の赦しを得、罪の力から解放されている者、また神の国の市民即ち神の子どもとされた者、そしてみこころにかなった生活をしようと心から願ってそのように望む者だけが、勝利の栄冠を得るために走り通すことができたのです。今司会の兄弟に読んでいただきましたコリント第一の手紙9章24節からもう一度読みましょう。非常に大切な箇所です。

コリント人への手紙・第一 9章24節から27節

競技場で走る人たちは、みな走っても、賞を受けるのはただひとりだ、ということを知っているでしょう。ですから、あなたがたも、賞を受けられるように走りなさい。また闘技をする者は、あらゆることについて自制します。彼らは朽ちる冠を受けるためにそうするのですが、私たちは朽ちない冠を受けるためにそうするのです。ですから、私は決勝点がどこかわからないような走り方はしていません。空を打つような拳闘もしていません。私は自分のからだを打ちたたいて従わせます。それは、私がほかの人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者になるようなことのないためです。

つまり失格者になる可能性がある、ということです。

この2、3節は、パウロの全く個人的な告白であり、また証しです。パウロは節制こそが自分にとって必要であったことを思い起こしています。節制、自制、自己否定が、勝利に輝くための私たちに必要な前提となります。即ち、私たちは自分自身を否定し、一番大切なもののために枝葉のものを断念し、喜んで犠牲を捧げる用意を常に持っていなければなりません。

自分の栄光を否定しなければ、イエス様に従っていくことはできません。喜んで犠牲を払う決心を持っていない者は、勝利の栄冠を勝ち取ることができません。いつも自分だけを大切にする者は、イエス様が再臨されたときに大きな失望を経験するようになります。この世を思う心、快適な生活をしたいと思う気持ち、快樂にふけったり、傲慢な心、自分が主役を演じたいと思う気持ちなどにいつもとらわれている者は、走るべき行程を走り尽くすことは決してできません。

心から主を思い、「日常生活が本当の信仰生活となった者」だけが、イエス様によって強められます。私たちがそのような信仰生活に入ったときに初めて、いくら走っても疲れることのない者となります。私たちはそのようなときにだけ初めて、スタートラインからゴールインするまで、全速力で信仰の走るべき行程を走り尽くすことができるのです。そのようにして走り抜いた結果、天にいます審判者、即ち、賞を与えるお方は私たちに勝利の冠を授けてくださいます。それと同時に、パウロは大きな危険をも忘れなかったのです。それは、あらゆるキリスト者に対して共通して言えることですが、他の人に福音を宣べ伝えておきながら自分は失格者にならないように、自制と自己否定とをし続けなければならないということです。

私たちはパウロと同じような心構えを持っているのでしょうか。それは次のようなことをはっきりさせることによって、知ることができます。即ち、イエス様のために自分のいのちを失う者だけが、いのちを得るようになります。

よく引用されるヨハネ伝 12章24節を読むと、イエス様は次のように言われました。
ヨハネの福音書 12章24節

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのみ実です。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。」

また

マタイの福音書 16章25節

「いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者は、それを見いだすのです。」

とイエス様は言われたのです。また、イエス様は決して群衆から誉められるためにことをなさったことはなかったのです。ルカ伝の9章を読んでみましょう。

ルカの福音書 9章57節、58節

さて、彼らが道を進んで行くと、ある人がイエスに言った。「私はあなたのおいでになる所なら、どこにでもついて行きます。」すると、イエスは彼に言われた。「狐には穴があり、空の鳥には巣があるが、人の子には枕する所ありません。」

わたしはホームレスです、と。

ルカの福音書 9章59節から62節

イエスは別の人に、こう言われた。「わたしについて来なさい。」しかしその人は言った。「まず行って、わたしの父を葬ることを許してください。」すると彼に言われた。「死人たちに彼らの中の死人たちを葬らせなさい。あなたは出て行って、神の国を言い広めなさい。」別の人はこう言った。「主よ。あなたに従います。ただその前に、家の者にいとまごいに帰らせてください。」するとイエスは彼に言われた。「だれでも、手を鋤につけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくありません。」

イエス様は次のことを言われました。弟子となることは激しい闘いを意味する。そしてあることをする場合、前もってその費用を計算し、それを支払う用意ができた者だけが、実際問題として本当に主に従っていくことができる、ということです。

14章を読んでみましょう。

ルカの福音書 14章26節から33節

「わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができません。自分の十字架を背負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。塔を築こうとするとき、まずすわって、完成に十分な金があるかどうか、その費用を計算しない者が、あなたがたのうちにひとりでもあるでしょうか。基礎を築いただけで完成できなかつたら、見ていた人はみな彼をあざ笑って、『この人は、建て始めはしたものの、完成できなかつた。』と言うでしょう。また、どんな王でも、ほかの王と戦いを交えようとするときは、二万人を引き連れて向かって来る敵を、一万人で迎え撃つことができるかどうかを、まずすわって、考えずにいられましょうか。もし見込みがなければ、敵がまだ遠くに離れている間に、使者を送って講和を求めましょう。そういうわけで、

あなたがたはだれでも、自分の財産全部を捨てないでは、わたしの弟子になることはできません。」

意味は分かるでしょう。戦いがなければ勝利なし。十字架がなければ栄冠なし、です。

イエス様は妥協せずに、断固として次のように言われました。「あなたがたはだれでも、自分の財産全部を捨てないでは、わたしの弟子になることはできません」と。

このように喜んでイエス様に従っていく兄弟姉妹ばかりいるわけではありません。そのような兄弟姉妹は、いつまでたっても霊的信仰的に成長することはありません。そして、他の人に対しても祝福を与える人になりません。勝利に満ち、実り豊かにイエス様に従うことの奥義とは、しばしば他の兄弟姉妹たちから遠ざけられています。しかしそのような状況にあるとき、絶望してあきらめてしまうか、或いは心から祈り主にだけ頼るかに分かれるのです。いずれにしても、罪を告白しない限り、必ず障害物にぶつかってしまいます。つまり、その障害物とは、その人だけが知っている罪、嘘、偽り、或いは性格的な弱さによって犯した罪、悪い習慣、今までの悪い関係を完全に断ち切ることなく妥協して曖昧にしてしまうことです。それらは信仰の妨げとなります。

ですからイエス様とイエス様のために約束された賞を得るために、罪の束縛から自由にさせていただくよう告白すべきことがあれば、すべてを隠さずに告白しましょう。別れなければならない人とははっきりと別れましょう。はっきりとした態度をとりましょう。そのとき初めて、主の祝福が私たちの上に降るのです。

聖書は単に主の勝利についてだけでなく、人間の責任についても語っています。即ち、イエス様から与えられる価なしの恵みについてだけでなく、私たちの献身の必要性についても語っています。ですから、私たちは心の中で次のように言うべきです。「私はもはや私自身のエゴを知らない。私は私のエゴとは全然関係を持たない。私は私自身の願いのために思いわずらうことなく、エゴを大切にしない。というのは、私と私のエゴとは離婚したものであるから」と。ガラテヤ書 2 章 20 節の意味はそのようなものなのではないでしょうか。19 節から読みます。

ガラテヤ人への手紙 2 章 19 節、20 節

「しかし私は、神に生きるために、律法によって律法に死にました。私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。」

次に、競技の規定について一緒に考えましょう。オリンピックの競技が始まる前に、競技者たちは宣誓によって責任を明らかにしなければならなかったのです。即ち彼らは競技

の規定を守る義務を持っていたのです。例えば、定められたコースに従わずに勝手に最短距離を走ったりすることは許されなかったのです。全競技を規定に従って行なうことは、非常に苦しいことでした。しかし、定められた規定を忠実に守った者だけが勝利者として冠をいただける見通しを持つことができたのです。心からイエス様に従おうとするとき、或いは忠実な証し人として主の証しをするときに、必ず出てくる諸困難を決して避けないようにしましょう。イエス様は決して罪の前に降伏なさいません。したがって、私たちもまた、罪の前に降伏してはなりません。節制を守りましょう。そして快樂や享樂、或いは自分の利益や楽な生活など、走るべき行程の妨げとなるようなものは捨てましょう。

自分の全生涯をイエス様にゆだねましょう。献身は豊かな実をもたらします。祝福はただ自分を無にすることによってのみ与えられるのです。それはイエス様のためになされるあらゆる霊的な勝利と働きの原則です。

イエス様のためにいのちを失うことは、目標に向かって走るあらゆる競技者にとって、規定に従って競技をすることを意味します。それはイエス様ご自身の場合にもそうでした。

私たちの場合はいったいどうでしょうか。イエス様は、競走者として、競走者そのものであられました。即ち、自分の前に置かれている喜びのゆえに十字架の死を忍ばれた、と記されています。

よく読む箇所ですが、もう一度読みましょう。ヘブル人への手紙 12章は非常に大切なみことばです。ヘブル書の著者は、せつかく救われたのですから、救われた人々は走ってもらいましょう、走り続けてもらいましょう、戦ってもらいたい、と。

ヘブル人への手紙 12章1節

こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。

走るとは何か、次の節を見ると分かります。

ヘブル人への手紙 12章2節

信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをもものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。

イエス様は競走者でした。パウロもまた競走者でした。そして彼は信仰生活の中で既に目的を目指して天の栄光を得ようと一心に走り続けていたのだということが、ピリピ人への手紙3章を見ると分かります。ちょっと読んでみましょう。ご存じのように、パウロはこの喜びの文(ふみ)と呼ばれている手紙をローマの刑務所の中で書いたのです。

ピリピ人への手紙 3章13節から16節

兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕えたなどと考えるはいません。ただ、この一事

に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。ですから、成人である者はみな、このような考え方をしましょう。もし、あなたがたがどこかでこれと違った考え方をしているなら、神はそのこともあなたがたに明らかにしてください。それはそれとして、私たちはすでに達しているところを基準として、進むべきです。

前に読んでいただいたように、パウロは、「私そのものは決勝点がどこかわからないような走り方はしていません。空を打つような拳闘もしていません。私は自分のからだを打ちたたいて従わせます。それは、私が他の人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者になるようなことのないためです」と。そのような事態があり得るからです。使徒行伝 20 章 24 節。パウロはまた言ったのです。

使徒の働き 20 章 24 節

「私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。」

素晴らしい告白です。イエス様は競走者でした。パウロも競走者でした。もう一つ「主のみことば」もまた競走者である、と言えます。パウロは主のことばが早く広まるようにと祈ったのです。テサロニケ第二の手紙の 3 章 1 節を読むと、次のように書かれています。1 節だけです。

テサロニケ人への手紙・第二 3 章 1 節

終わりに、兄弟たちよ。私たちのために祈ってください。主のみことばが、あなたがたのところと同じように早く広まり、またあがめられますように。

原語では非常に速く走るように、という意味です。聖書が最も大切にされるように、と要求しています。聖書は、私たちとともにあって私たちを支配し、警告し、力を与える私たちの友なるものです。そして現在と将来にわたって主の愛のご計画を私たちに見させるただ一つの書物です。聖書は、単に読まれるだけでなく、個人的に体験されなければなりません。聖書を体験的に知った兄弟姉妹は、この喜びの訪れを一人でも多くの人々に宣べ伝えずにはいられないのです。

パウロは、エペソにいる人々に書いたことがあります。「機会を十分に活かして用いなさい。悪い時代だからです」と。このみことばは、私たちが今の時を主のために活かして用いることを意味しています。即ち、全生涯を一分一秒ごとに主に明け渡し、全てを主に委ねることにほかなりません。私たちが徹頭徹尾全てを主に委ねるなら、主のみことばも早く広められる結果になります。私たちは恥じることなく「主イエス様」を多くの人々の前で

忠実に証しするなら、みことばはずっと早く広められるようになります。

このように個人的に証しすることは非常に大切なことです。パウロの証しは本当にすごい証しです。使徒行伝20章31節です。もちろんパウロは大げさに言う人ではなかったのですけれども、心から言えたのが31節です。

使徒の働き 20章31節

「ですから、目をさましていなさい。私が三年の間、夜も昼も、涙とともにあなたがたひとりひとりを訓戒し続けて来たことを、思い出してください。」

素晴らしい証しです。「三年の間、夜も昼も、涙とともに」とあります。一人一人に対して証しをする用意のない者は、多くの人に語る権利を持っていません。

伝道の歴史を振り返ってみると、主な伝道方法として、大衆伝道よりはむしろ初代教会などにみられる個人伝道のほうが、みことばを早く走らせた結果になっているのです。

キリスト者が他の人々に向かって、イエス様が自分にいかに大いなることをしてくださったか、と言うことと同時に、私たち自身に対しても主イエス様は同じように恵みを与え、救ってくださることを証しする責任を持っています。

最後に、賞について聖書から読み取ってみたいと思います。競技の勝利者は、ギリシャ人にとって最高の名誉を得た者と一般に考えられていました。その勝利者が自分の故郷に帰ったときには、最高の尊敬をもって歓迎されたのです。紀元前776年から紀元217年まで、勝利者とその故郷の名前は全部漏れなく書き記されて今日に至っています。

新約聖書の中に5種類の栄冠について記されています。

*一つの栄冠とは、「義の栄冠」、「義の冠」です。

テモテ第二の手紙4章8節。パウロが殉教の死を遂げる前に書いた手紙の中の証しです。
テモテへの手紙・第二 4章8節

今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけでなく、主の現われを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。

心からイエス様の再臨を待ち望む者は、この義の栄冠をいただくようになります。

*二番目。「朽ちない冠」、前に読んでいただきました箇所の中に出てくるみことばです。
コリント人への手紙・第一 9章25節

また闘技をする者は、あらゆることについて自制します。彼らは朽ちる冠を受けるためにそうするのですが、私たちは朽ちない冠を受けるためにそうするのです。

私たちは彼らと全く違って、朽ちない冠を受けるためにそうする、とあります。

* 三番目。テサロニケ第一の手紙 2 章 1 9 節に、「誇りの冠」という表現が出て来ます。

テサロニケ人への手紙・第一 2 章 1 9 節

私たちの主イエスが再び来られるとき、御前で私たちの望み、喜び、誇りの冠となるのはだれでしょう。あなたがたではありませんか。

* 四番目。ヤコブ書 1 章 1 2 節にまた別の冠について書いてあります。「いのちの冠」です。

ヤコブの手紙 1 章 1 2 節

試練に耐える人は幸いです。耐え抜いて良しと認められた人は、神を愛する者に約束された、いのちの冠を受けるからです。

黙示録の中にも同じ表現が出て来ます。「いのちの冠」と。

ヨハネの黙示録 2 章 1 0 節

「あなたが受けようとしている苦しみを恐れてはいけない。見よ。悪魔はあなたがたをためすために、あなたがたのうちのある人たちを牢に投げ入れようとしている。あなたがたは十日の間苦しみを受ける。死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与えよう。」

「死に至るまで忠実でありなさい。」そうしなければもちろん駄目、とあります。

* 五番目。もう一つの冠について、第一ペテロ 5 章に書かれています。「栄光の冠」です。

ペテロの手紙・第一 5 章 3 節、4 節

あなたがたは、その割り当てられている人たちを支配するのではなく、むしろ群れの模範となりなさい。そうすれば、大牧者が現われるときに、あなたがたは、しばむことのない栄光の冠を受けるのです。

したがって、永遠のいのちや救いだけが大切なのではなく、イエス様のご栄光が自分にとって最高の喜びとなることこそ、最も大切であることを忘れてはなりません。

イエス様はヨハネ伝の中の祈りの中で、このことについて考えられたに違いありません。

ヨハネの福音書 1 7 章 2 2 節

「またわたしは、あなたがわたしに下さった栄光を、彼らに与えました。それは、わたしたちが一つであるように、彼らも一つであるためです。」

ヨハネの福音書 1 7 章 2 4 節

「父よ。お願いします。あなたがわたしに下さったものをわたしのいる所にわたしと

いっしょにおらせてください。あなたがわたしを世の始まる前から愛しておられたためにわたしに下さったわたしの栄光を、彼らが見るようになるためです。」

イエス様は、将来多くの兄弟の中で長子として完全に明らかにされるのです。

ローマ書 8 章 28 節は一番よく知られていますが、29 節も同じように非常に大切です。

ローマ人への手紙 8 章 28 節

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。

栄光を確信しています。

ローマ人への手紙 8 章 29 節

なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです。

私たちは天の召しにあずかっている者、そしてイエス様にあずかる者となるのです。

ヘブル書の著者も、同じようなことを記したのです。

ヘブル人への手紙 3 章 1 節

そういうわけですから、天の召しにあずかっている聖なる兄弟たち。私たちの告白する信仰の使徒であり、大祭司であるイエスのことを考えなさい。

14 節

もし最初の確信を終わりまでしっかり保ちさえすれば、私たちは、キリストにあずかる者となるのです。

審判者であられるイエス様は、勝利を得た競走者たちとともにご自身の栄光を現わされるのです。主はご自身、王としての栄光をただ一人ご自身のために持とうとしておられるではありません。信仰の勝利者たちもまたともに、主のご栄光にあずかるようになるようとりなしてくださいます。勝利者たちは主イエスとともに世々限りなく支配すべきである、と聖書は何度も何度も語っているのです。

ヨハネの黙示録 22 章 5 節

もはや夜がない。神である主が彼らを照らされるので、彼らにはともしびの光も太陽の光もいらない。彼らは永遠に王である。

これが競技者の目標です。そのために、私たちは主にふさわしく歩むことが大切です。ですから、パウロはテサロニケにいる人々に書いたのです。

テサロニケ人への手紙・第一 2 章 12 節

ご自身の御国と栄光とに召してくださる神にふさわしく歩むように勧めをし、慰めを与え、おごそかに命じました。

しかしすべてのキリスト者が勝利の栄冠を得るのではなく、ただ忠実に全てを主にゆだねた兄弟姉妹だけが勝利者となる資格を与えられるのです。私たちは安易な生活をしようと思えばすることができます。私たちは犠牲なしに与えることができ、苦勞することなく働くことができ、自己否定なしに愛することができるでしょう。私たちは競走者でなくても良いのです。目標に向かってゆっくり前進してもかまいません。私たちは激しい戦いや苦勞と関係なしに生きていくことができますが、私たちは冠を与えられないときに驚いてはなりません。死の代償なしには賞は得られません。本当の苦勞がなければ報いはありません。激しい戦いがなければ勝利の栄冠は与えられません。ただ忠実なる者だけが冠を得るようになります。

最後に、競技者が失格とされることについて考えて終わります。私たちはいかなる場合にも次のことを忘れてはなりません。その競技に参加することは必ずしも賞を保証するとは限りません。冠は、競走の始めにではなく最後に与えられるものです。疑いもなく、救いと永遠のいのちとは、十字架の犠牲に基づいた信仰、主の恵みの贈り物です。しかし、勝利の冠は忠実な信仰によってのみ与えられます。ですから聖書は真剣な警告を与えています。

ヨハネの黙示録 3章11節

「わたしは、すぐに来る。あなたの冠をだれにも奪われないように、あなたの持っているものをしっかりと持っていなさい。」

と記されています。

また、パウロはテモテ第二の手紙2章5節に、
テモテへの手紙・第二 2章5節

また、競技をするときも、規定に従って競技をしなければ栄冠を得ることはできません。

と書いたのです。

コロサイにいる兄弟姉妹にも、パウロは次のように書きました。
コロサイ人への手紙 3章24節、25節

あなたがたは、主から報いとして、御国を相続させていただくことを知っています。あなたがたは主キリストに仕えているのです。不正を行なう者は、自分が行なった不正の報いを受けます。それには不公平な扱いはありません。

その成功が何を意味しているか、解釈の問題になると、私たちは必ずしも厳密な意味で

一致しているとは言えないかも知れませんが、その成功が聖書に記されているゆえに、それを無視したり、或いはその鋭い警告を曖昧にしてしまうことは許されません。

パウロは、確かにキリスト者は救われているがその全てのわざが焼き尽くされる可能性についても語っています。この箇所もよく知られています。コリント第一の手紙は、言うまでもなく、イエス様の救いにあずかった人々に書かれたことばです。未信者のためではないのです。

コリント人への手紙・第一 3章13節から15節

各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現われ、この火がその力で各人の働きの真価をためすからです。もしだれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。もしだれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、自分自身は、火の中をくぐるようにして助かります。

ここで、助かると書いていますが、本当は救われます、となっているのです。パウロはイエス様に選ばれた器であるにもかかわらず、不忠実になったり退けられた者となったりして賞を得られなくなる危険性を持っていることについて、絶えず警告したのです。ですから、彼は前に読んでいただきましたように、

コリント人への手紙・第一 9章26節、27節

私は決勝点がどこかわからないような走り方はしていません。空を打つような拳闘もしていません。私は自分のからだを打ちたたいて従わせます。それは、私がほかの人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者になるようなことのないためです。

と。

これら全てのことは非常に真剣な問題です。救われた喜びと主のご再臨を心から待ち望む場合にも、新約聖書のこの真剣な警告を決して忘れることは許されません。このような警告は、具体的には何を意味しているのでしょうか。私たちは次のようなものが並んでいると言うことは分かります。即ち約束と警告。前もって喜ぶことと神聖な恐れ。幸せと真剣さ。

最後に、次のような問いについて考えましょう。

- * 第一番目。もし競走の途中で落伍してしまったら、その者は栄冠を与えられるのでしょうか。それに対して、聖書ははっきり NO と言っています。
- * 二番目。他の人をイエス様のもとに導けなかった者に対して、冠が与えられるのでしょうか。この問いに対しても、聖書は NO と言っています。なぜなら多くの人を義に導いた者だけに冠が与えられるからです。
- * 三番目。主の群れを守らなかった者、即ち兄弟姉妹のために労をとらなかった者は報いを得るのでしょうか。これに対しても聖書は NO と言っています。

* 四番目。忠実なるしもべ、イエス様のご再臨を心から待ち望む者のために義の冠が約束されています。その反対に、不忠実で主のご再臨を真に待ち望むことをしない者に対して、この冠が与えられるのでしょうか。聖書はNOと言っています。

* 五番目。試練を耐え忍ばなかった者に対して冠が与えられるのでしょうか。もちろん、聖書ははっきりNOと言っています。

ヤコブの手紙 1章12節

試練に耐える人は幸いです。耐え抜いて良しと認められた人は、神を愛する者に約束された、いのちの冠を受けるからです。

とあります。

私たちの生涯は永遠の目標に対して仕えるべきです。私たちの「時」は、この永遠から始まることによってその意味と内容を持つことができます。その道は永遠の目標のために続いています。永遠にわたって価値あるものだけが、私たちの生涯においても本当に価値あるものです。その他の多くのものでも現在非常に大切であると思われるものが少なくありませんが、本当の意味はこの永遠なるものの中にしか存在しません。主の国なしには、全ては世的なものであり、価値のないものです。

この永遠なるものとしてパウロは次のような証しをしたのです。「キリストは私のいのちです」。意味は、「キリストとは私にとってすべてのすべてです」と。

主の復活の勝利は現在も私たちのすべてを貫いています。イエス様は私たちの「すべての主」であり、いのちの核、私たちの力です。すべての会話は主の前で話すことであり、この世のあらゆる仕事はすべて主イエス様に奉仕することです。

私たちの日常生活は、すべてイエス様による信仰生活です。現代の世においてすべてをゆだね明け渡す者は、この地上の生活においても決して損をしてはいません。イエス様は私たちをひき上げ、私たちの地上での生活をきよめてくださいます。したがって私たちは、ただ単に救われた喜びに満足するのではなく、一人一人に課せられた義務について真剣に考えなければならないのです。勝利を得る者だけが冠を得ます。

了